恰野集

春上

土岐文庫
文庫17
W46
1

文庫 17
W46
1

昭和六十年二月一日
志茂吉麿氏寄贈

010185194855

拾遺集乃序

貞長清原の雅風あらしてくぬかふ
世ふる影よ髪をまつくるるとなり
さかりを限に影ふるはるよむ春の
いてきしよりこのまふしたるふるそん髪
詠をかせかせかとハ左きこのまて

ふくハるたゝねの夜の夢ハ覚ぬる
うゝみを乃てよすゝふ夕ぶ和ぶ
ゆ波の つゝ絶ぬ浪ぬれ袖の海ぶ
ゆぬるを風ぶ月ぶ夕ぶ波の乃て
紫雲の方をぬき出く波の髪ぶ
乃るゆ夜ぶ波の影を志ぶて

ゆ乃ぶ行きぬ世ぶ乃ぶ
ぶ乃ぶ行ぶ乃ぶ
ぶ乃ぶ行ぶ乃ぶ
世の乃ぶ行ぶ乃ぶ
ぶ乃ぶ行ぶ乃ぶ
ぶ乃ぶ行ぶ乃ぶ

かきをのこしたるぬをやさて古きる物と
きらんあけくるをんくにてのこりたら
めをてどくにいるあつき仮すとておむ
ちのけよくんくけしくんくおりんくハ
ぬしの名をつけてはつ書をしたてたこと可
をくこうるるひ法のこめハてよくん

ゆ仕ハ心みを性質をふつる夜
かくを名つるのをそをぶしふの赤ふの
おををにをををれやをれふるくをるをひを
るをおをハ和るかねをるをを思ひて也
けの代書をくくむ人ハを風のつくをくを
人をを日をてはるくをんて思るをむす

されたきこゝろしまてくらゐのつるかおもひのこ
孫家の為にくなししハなかなかくるしき
抹茶ことしまさんとやさそかく茶菓子の
このとぶら起るとらへくこの身し次がの菓
みちくし字ま也ひよ也とこゝへことさるゝ
とおゝすなる我のの菓ハしくくらの家

おのれの我まゝあれはわよ我人の心をくともを
息よかりかくされぬすてはつハまゝて
みやひ心もすこそれ足こゝ心を深くはら
はへてんをとハちしく人の心をつとむすとおもひ
詞ハ中つよのなることのれるかしよの菓子中
みくもうるはしきことよりてよみ出むこれ

あまたものしきかされたハことのついてにくし
いさゝかの為にとてかくをかくしおくるなまし
あかける文化三年みな月つごもりの日
てりしるもそれかのふ藤しるす

凡例

古今をはしめ合せん為なりはとたゝおほくもつらん
されハ例なとをもらしてつきなくねとえのまゝなりて
たゝきこえおもはしまゝなるのもしあへけるなん
学ひてゝる歌詠なとをもせん時なとも心へき歌乃
つふしとおもひなしれぬえはしうきおもあきハより
こゝる古歌をもとれしかをかよりこんとよりにもとてこの紀
つゆてゝるに歌詠をもえしとせるをもたくえへしくなりまて
組合せなとをとる歌の数も限なくおほかる古なき
ことらあまりしてもなも抽しいのねこときそえらのにまへなきとハ

本集よりえらびて異類の歌をもてつくれり
等等集をしめ歌をえんよませつるをよにひとと
のやうよいかにもさるは等等集の中にも
源氏源月まくらの物語をもとる歌おほく
をかにも歌をなほうもつくりとおりきもあれども
しらなくもあんなける
歌の名をもとりてもあやしくもさまざま
まれるんをつるに物語をはじめ
この記をもつくりつるもの
やうにかんなるもあるにその物にもあるべきき

ものをもとりてつくれはこれ雅俗の例をもとり
仏法をもとりて異記せるもの中にもおのれ
おのれ本集をもとりたるかの例をもとりの
つるをもの省略をもとりはんんをもとり猫書
のうちもとりしらんとおもひをいそ僧名をもとる
をもとりをほうをつるぬるをもとりてまひるをせん人を
いつをもとりしらるをこと
法文をもとり偈の句歌をもとりてつくるを中
集上つ代をもとりて釈教部をもとる後
拾遺集をもとり釋教の歌を類をもとりてのきれ

たれは殺きるんよ雑きのもろるんし古寺山ち
等れ影乃ふるもろこるよ出やり
時この鳴りけけき笠のあるまるみ出やうて
一夜ろるさやうよんゆろうちるるきくちきを子
くてう笠れ物と四のはようわきたきてうれる弁に
手ちのこるもるもれ物のあれれもれようも
うるて古くれ秋まるみたこうもおくれ物の紅葉
ちるの十二月れ月のさうもふくるもい笠紅葉神
なは月のろて葉のをあまねき手おくその外るれ
ろへ山ろ弁は葉ろ紅葉れてうるれ乃ろるまれ

まのうせて秋よひうき出ちんろ古笠まもと物の
やうまも秋冬をんるもはるもあるんいるきるあ
ちるへきるるもれもへるるれるへて古ろの弁まも
ろんをれるれろれの乃ろうはるうもれるへく
山ほうきるんるもへ笠の物をよつの射にるわ
きるるたるこの風きいはをるるてみを時まう
取うちをまるこれるれるはを物よつきを時
ときのけちあるもしるるるるるちんい弁をうし
ろうまおるるもるまるいるへきるるるるものう
山笠ろて古笠まよろ山ものはるひるるはるひるるみ

やたの海とぬまとをとこうろ

月の影四季まわるなかにも春と夏との新古

いつれのもまさりいきそいの原て秋の月は雑

同しきまるるもたえみ今の人乃よそをるも

秋の影なるに月とめこいそ秋のよせるきもはし

てそ世をゆるをたもまるるまつ人とあるは

詠まさるへきものとこそおもへ集中まこと秋

の歌ふ雑の月まとえまりけらんゑむ人のん

にら秋は組合をる月はおふこは西の意歌

こめてよむ色きの歌乃例とふ歌

るもあのほへ

歌ハをちをさ山ろの人もおもはるる袖ほうと

おけすき限をひ海はをう集を書取あるこうる

ちとの新集まをもしまるるこうはつるあやき

月にうてるのきうの月より見出をまして

るをいきをさもいをこ今をまるこ家の集を

おせるこをる色きを集なをるの名等を増補

すあるに拾遺をもをちまくおもへるいこはちう

ちん世をもつねなきを

清原雄風

万　萬葉集

こいそのくさもとりあつめてこれをもおき
てしとゝのまくをせてもとりあつめて　新採百首
千歌　萬葉集佳消　佳消拾遺等をはせて
ゝるものゝやうなるものゝをあつめ

古　古々集

金　金葉集

勅　彩勅撰集

六　古今六帖

後　後撰集

詞　詞花集

月　月清集

拾　拾遺集

後拾　後拾遺集

千　千載集

新　新古々集

續詞　續詞花集

代　萬代集

以集板よりもとりあつめたるものゝ
おきなるにいと後まで
なるはなをまとりあつめ通用
今は補もれたるやうのものゝ
てふもれたるとてこゝに出せんとてこゝに出せるものゝまゝ出せり

年内立春　元日
門松　若水
雪中梅花　元日雪
立春　元日雪
立春江　立春湖
立春水　立春山
名所立春　立春祝
山家初春　望初春
初春衣　早春
早春霞　早春月
早春山　山家早春

元日雪　元日霞
門松　若水
雪中梅花　寒鳥遠春来　鶯来
立春　元日雪
立春風　立春霞
立春池　立春湖
立春山　故郷立春
立春川　山家立春
初春　初春霞
野初春　初春河
早春朝　早春雪
早春月　河早春
故郷早春　早春雪

山家元日
鶯従東来　幽栖春来
立春　立春雪
海辺立春
立春雪　立春川
閑中立春
初春山　初春雪
初春河　初春雪
早春風　澤早春
早春雪

早春待花　早春興　春水　春釣氷解
瀧春和春　氷消田地　春氣解氷　白馬節會　子日
子日松　子日小松　雪中子日　雪霽子日　南亟子日
鄰子日　禁中子日　所上子日　子日催興　子日祝
子日述懷　霞　嚮霞　霞和春　空霞
春霞　朝霞　夕霞　山霞　桑山霞
山路霞　嶺霞　霧霞　霞藏山　霞隔山
霞隔遠山　霞隔山樹　山家霞　里霞　野霞
原霞　行路霞　曉路霞　閑路霞　羈旅霞
名所霞　社頭霞　霞隔古寺　都霞　故郷霞
水郷霞　霞隔水郷　海邊霞　浦霞　晩霞隔海

海路霞　霞隔行舟　河邊霞　湖上霞
橋上霞　檜原霞　霞隔松　霞隔遠樹
霞春衣　寄霞述懷　春霞　待霞
久待霞　鶯囀　春來霞遲　早鶯　初聞霞
聞鶯　早上聞霞　對客聞霞　霞和春
山鶯告春　古巢鶯　谷霞　霞出谷
雨中霞　霞中霞　曉鶯　囀霞
山霞　山家霞　野霞　野亭鶯　朝霞
籠中鶯　行路鶯　閑居霞　里鶯　園霞
樹間鶯　梅間霞　鶯啼梅　竹林鶯　陶居霞
花中霞　鶯過　暮春鶯　春情去霞　柳上鶯
霞稀

寄雪述懷　若菜
野若菜　栗若菜
若卿若菜
春雪
江春雪
野殘雪
樹陰殘雪
山路雪
梅初開
梅似雪
依風紅梅
摘若菜　贈人若菜　雪中若菜
殘若菜　澤若菜　田若菜
景春採若菜　寄若菜祝　寄若菜述懷
野春雪　一岳春雪　木春雪
春雪欲消　寄春雪述懷　殘雪
故郷殘雪　草殘雪　木殘雪
山殘雪　餘寒　降雪月
梅　載梅　若木梅
待梅　梅花春久
梅盛　雪中梅
梅風　梅薫　依梅待風
梅香　梅花久薫　梅花遠薫

梅香何方　梅薫袖　梅近袖香　梅香留袖
梅花染衣　梅薫枕　梅香八関　梅花夜芳
夜梅　聞夜梅　夜梅尋香知　曉梅
朝梅　夕梅　月前梅　梅花不異月
社頭梅　古宮梅　古宅梅花　禁庭梅
簷端梅　庭梅　垣梅　山家梅
旅宿梅　行路梅　梅香妨道　園梅
杉間梅　名所梅　梅花所々　野梅
見梅　梅花移水　梅香移水　水畔梅花
梅花聚人　獨見梅　依梅待人　梅庭客
梅花留客　梅花贈客　梅開得客
駐梅花　挿頭梅　折梅　折梅贈人
愛梅　惜梅花　惜梅花　梅花狩散

落梅　閑庭落梅　水邊落梅　梅花落水　梅花落衣
二月雪落衣　紅梅　雪中紅梅　紅梅白梅香異
寄梅懷懷　寄梅懷舊　柳花　柳絮
古柳　雨中柳　柳露似玉　霞間柳　夜柳
柳風　柳風靜　柳亂風　柳絮隨風　禁庭柳
閑岳柳　山家柳　故鄉柳　水邊柳　何處柳
池邊柳　柳臨池水　柳柳映池水　柳柳映水　柳柳
谷柳　行路柳　近柳　遠柳　柳絮
柳垂糸　柳頭柳　殘柳　芳草　春草
雨中芳草　垣根芳草　山家芳草　野芳草　野草綠短
蕨　野蕨　山蕨　春夜月

春夜待月　江上春月　不明不暗朧朧月　春曙月　霞曇月
春山月　春曙　春曙雲　春山曙　山家春曙
山岳春曙　遠村春曙　海邊春曙　夕春雨
夜春雨　山春雨　林下春雨　野春雨　行路春雨
旅春雨　閑中春雨　寄春雨懷　歸雁　春鳥
花前鶯　雁別花　歸雁忙　雨中歸雁　霞中鶯雁
霞歸雁衣　雲間鶯　暮雲鶯　霞中鶯雁　曙鶯鳥
月前鶯　歸雁似字　歸雁幽　鶯雁遠　遠歸雁
歸鳥少　遠近鶯　峯歸雁　海歸雁　浦鶯雁
田歸雁　田里歸雁　羈中鶯雁　行路鶯　都歸雁
歸雁哭秋　春駒　牧春駒　野春駒

原春駒　澤邊春駒　雉
燒野雉　原雉　雲雀
夜半呼子鳥　山呼子鳥　鄰呼子鳥　野雉
暮春呼子鳥　花　櫻　花　櫻　同　呼子鳥　夕呼子鳥
花櫻　雉　櫻　山家待春　閑中待花　待春　深山呼子鳥
對山待花　山寒之花遲　山家花遲　待花日暮　老木櫻　山重櫻
山花遲　尋山花　尋花遠行　尋花日暮　待花遲年　待花
尋花　尋花不定費　雨中尋春　花初開　栽花　老後栽花
見原山春　費之日尋花　尋花日暮　山家待春　遠尋花　山路見花
尋花遠行　尋花日暮　初花　山初春　遠尋花　遠尋花
遠見春　初花　山花初綻

山花始開　始見山花　待得春一枝　花開恨美人　花盛
山花盛　春所花盛　庭花盛　見花　見盛花
庭前見春　花下見春　夢見花　靜見花　朝見春
每朝見花　盛日見花　終日見花　見花日暮　常見花
每春見春　年之見春　每年見春　見春惡雨　見山花
翫山見花　遠見山花　旅中見春　行路見花　馬上見春
名所見花　入隣家見春　見花不排庭　獨見花　老見花
見花感身　見花思昔　思花　思家花　思都花
思樂遊花　思故鄉花　所之思花　思山花　遠思山花
思山里花　夜思山花　晝夜思花　遠思花　老思花
翫花　翫山花　終日翫山花　禁中翫春　見南殿櫻

雨中翫花　翫花経年　毎年翫花　老翫花　愛花
禁庭愛花　毎年愛花　惜花　花未飽　心未飽花
馴花　對花　獨對花　對花忘人　對花思昔
折花　月前折花　毎朝折花　毎年折花　折花驚人
折花贈来　近花　遠花　遠花離家　遥見人家花便入
寄天花　月前花　花不明月　花色不異月　月入花灘晴
寄雲花　花雪　花似雪　寄風花　惜落花
花随風　風驚花芳　花香随風　花薫風　花厭風
對花厭風　依花厭風　依花恨風　霞中花　霞中花薫
霞隔花　依花厭霞　花透霞　寄雲花　花雲
花似雲　遠花如雲　晩時厭雲　雲間花

松田學圖書

怜野集巻之一

春之部上

年内立春

万　月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ぬとか　家持
古　年の内に春はきにけりひとゝせをこぞとやいはん今年とやいはん　元方
新勅　冬ながらおのがたへと白雪のふる年かけて咲る梅が香　覚寛
今　あらためてとしも霞みて立春は昨日計ぞ冬は有ける　忠岑
六　年の内に春立ことを知顔に霞はまだきたなびきにけり　是之
月　年の内に春立ぬとや吉野山霞かゝれる峯の白雪　後實
〃　雪の内に春はきにけり鶯の又遅けくとなく声ぞ絶　重之女
〃　くれ竹のまだ白雪のふる年に春といふ名で去にけるかな　顕輔
〃　年の内に春は立きぬいづくにか此ころ日数をかぞへつゝ　長方
古　新しき年の始にかくしこそちとせをかねて楽しきをつめ　大歌所
後拾　いかにねておくる朝にいふことぞ昨日をこぞとけふをことしと　小大君
勅　天のとをあくる空も雲井より立かへりぬる春はきにけり　俊成

元日

元日雪

元日雪
山家元日
年枝
若れ

門松
春深来
幽栖春来
春深来

春上二

春上

立春天

代 あら玉の年ハ今日にもとまらなん立かへるとは遅くひとつ年　後法性寺入道

続 はれくもり霞のたちめるは天のとよりや春ハきぬらん　影仲

立春日

代 けふ立と空にしるくも見ゆるかなはれゆくけきハ浅緑なる　摂津

日 久かたの天のかぐ山てる日のかげまでも春ぞきにける　後徳大寺

立春雪

後 とくる間と待けるは春日山消ぬ雪の花と見ゆらん　親恒

新 きえのこる雪ふる里の空のいろもけさハかはりて春ハきにけり　宮内卿

立春風

金 春のくる夜のまの風のいかなれば今朝吹にしも氷とくらん　河内

続 へる瀬の岩まの氷いかならし春の風にや吹てとくらん　好忠

立春霞

万 きのふこそ年ハ暮しか春霞かすがの山にはやたちにけり　読人不知

拾 けふる霞たてるばかりにわかなの年ハ山よりこえてきにける　文幹

後拾 春のくる道のしるべハみよしのゝ山にたなびく霞なりけり　能宣

千 くるゝ春しるしの空に霞せば霞もふかくぞたちそめける　俊頼

新 ほのぼのと春こそ空にきにけらし天のかぐ山霞たなびく　太上天皇

海辺立春

日 春といへば霞みにけりなきのふまで浪まに見えし淡路島山　俊恵

立春江

代 いそのまにまつ山浪のよするとも浪とこそ見ゆれ春のこゝろも　俊頼

立春湖

後拾 冬ながら江にはのくもる見えぬよの枝よ春をしるらむ　好忠

立春池

月 けふよりや春のみなぎる池の水に春風にほのめかるらむ　家保

立春若

日 今はとて氷れる池の氷とけそめて春の若菜の下もえぞする　俊恵

立春川

千 三か山若菜もや春の立わたる雪の下もえ若てくうら　国信

立春氷

金 ほころびぬ細谷川のとけそめて氷よりもや春ハ立ぬる　肥後

立春山

新 岩まとぢし氷もけさハとけそめて苔の下水道もとむらむ　西行

山家立春

後拾 わがやどの里も春ハ越てとなりにけり山の里ハ霞そめける　侍従

代 ゆきも見し紀の霞たちわたる谷のいほりも春ハきにけり　家隆

月 とけやらぬ山のかげ見ればいかにも春の立らむ山の里　小侍従

故郷立春

新 みよしのは山も霞て白雪のふりにし里に春ハきにけり　後京極摂政

関路立春

代 鶯の鳴なる声をしるべにて関のまよ春ハきにけり　鎌倉右大臣

名所立春

新 年暮し涙のつらゝとけにけり苔の袖にも春や立らん　俊成

月 きのふまで名のみなりし芳野の春知らずもけふぞ霞める　実守

去天位
順
かぶとだかいの
はな山院
赤坂南の
宮山院
定家
ながとの
長宗
惟宗
丹後
信川
し摩
侍人公卿

去春祝
初美

初美嶽

初美山
山家初美
里初美
野初美

順
おなじ武蔵
ながとの

初美雨
初美雪

初美衣
里春

里美野
里美雪

春上四

早春後
早春義
早春雨
早春餘
河早春
澤早春
早春山
山寄早春
故郷早春
野早春
早春望
早春待花
早春興
春水
春氷
春雪
春雪報解
凍春雪
水清田地
春風解氷

白馬節会

子の日

子の日の松

雲中子日

三条中子日

海老子日

駒子日

禁中子日

雲ゝ子日
子の祝
子の述懷

通後
野遊
文内
三条大納言
本大臣北方
前内
公実
赤染衛門
肥後
道雅
宗後
紀宣
公任
高

殿
僧都
嘉知子
空蟬
夜頃寿

春上七

朝霞
代 なにはがた汐みちくらし朝ぼらけ霞にあまる沖つ白浪　法性寺入道

夕霞
万 かぎろひの夕さりくればさつ人の弓月がたけに霞たなびく　作者不知
代 いせの海やをちの釣する夕霞見えつゝ遠く漕ぐ舟の影　土御門院

山霞
万 あらかじめ代香向山にけるされば木のくれやすぞ霞かゝれる　家持
日 あらたまの年のはじめの春霞山にたなびき峯にかゝれる　作者不知
拾 よしの山ふる白雪の消えがてにかすみそめぬる花やさき見む　中務

遠山霞
金 梓弓はるのしるしに霞たつ山のはさへもかすみこめたり　長実
新勅 みわたせば春霞こそ青柳のかつらき山にかすむさらめり　藤原為家

山霞
万 けふ今え(?)けるにみゆくみゆる遠き山べに霞たなびく　中臣武良自
代 久かたのあまの香具山の立ちのぼる雲やかすみてたなびく山　後京極摂政
拾 いかにして…のとかげ見渡せば大和国山霞くるる　入道前摂政

嶺霞
代 峯に春霞の山のはにかかる霞さへ立のぼりけれ　安法
日 みねの…ゆくへの横雲の…　樹範

叢霞
日 …　仲正

霞
代 はるたちて…　皇后宮
千 つれなく…　清輔
月 …　顕昭
千 ちるは…　慈鎮
玉 春やとき…　定家
新 はる霞…　家隆
新 さびしさの…　少輔
玉 すむ…　隆信
新 霞…　為家
日 春…　俊成
日 浅みどり…　通信
代 つれなきにあらで…　匡房
日 はるのこころ…　侍従家経
拾 はなの…　はるのぶ

暁浦霞
同浦霞
羈旅霞
簷前霞
社頭霞
春陽古寺
野霞
水郷霞

六
かすみとかかるたぐひなき春の深みにある方のえぞなかなから　読人不知
月
朝ぼらけそれと立霞むよそながらもはひらきみんさやの中山　俊盛
ヨ
みちのくの紅の実にさそこれぞ春は霞で立かくれける　仲実△
大
けふもしかたのきとけふぞしも霞のあたりの浪はいかに吹らん　以正
月
日をへつゝ都は遠くなりゆけどたゞいつくれぬ春の浪みに　盛範
新
秋深み源くえまのらは霞みの中の山の鐘の音よきらん　清輔
代
久かたの雲井にみえし岸の松は霞のうちにまじり見ゆらん　後京極摂政
千
松かえは霞こむれど三日月の山本の春は立とくなから　匡房
月
神垣や柳まつる志かはまたいつ小春ゝ霞のかゝり　範玄△
月
あさみどり霞のうちに暮そめて春の鐘の声ひゞく也　隆季
日
いつとなき霞のうちにかすみそめし秋の夕ぐれ　教長
頂
くれはてゝ霞たなびく野の末は見えずなりゆくかな　隆信
勅
霞しく敷ける里よそ見ゆる春の江にうかぶ柚ハ　純国△
隆衡

月
ほのぼのといかはかりの水かげの霞みへ立つらむこの里　経盛
日
そのかみの里わたりぞきえのこる水の里ハ春の霞に　覚猷△
新
見わたせば浦の霞も立そめて塩焼く煙の浦　家隆
勅
わたつうみの春の霞たつ塩の風に浦人　宗内大臣
代
塩竈のうら行くも海人の霞の浦にけぶるらし舟　清輔
揺
たごの浦の霞の春に塩焼く煙たなびく舟　純定
代
志賀の浦の霞にしづく舟の浪の霞あらそふらむ　忠季
勅
わたつみのあとの海べにたどる船ゆへ立こむる夕霞かな　中院入道
自
夕まぐれ浦のとまやの霞とともに霞の浦に入ぬる　後恵△
代
おほ海の霞をへだてゝ沖の舟いづれの浦の春霞かな　秀能
続
浦霞の春ぞけふ立つ沖の舟の浦の霞ぞなる　隆緑△
代
なにはえの塩の霞や霞む浦にもくらべて遠き霞の浪　遠保法親
日
すみよしの霞の浦の霞ぞ深き春の夕ぐれ　寄隆
月
さざなみの春霞ぞ立ちそめし霞の浦に春まだき　重衡

河霧霞

橋上霞

梅原霞

松上霞

霞隔松

霞隔遠樹

霞春衣

寄霞述懷

寄霞懷旧

新　紅戸わたるとうりの里ふるまむれば霞ぞ立ぬ
有　わきもこがかの川せ行てはるばるとなれば霞ぞ立ぬ
後　石川のもつべそぞ吉金吹吉海の中山ゆ立ぬ
新　かつらの背のもみの葉を梅ばつて霞ぞ立ぬ
代　ゆき山路ゆ所のうしの夕霞ぞ立ぬ
日　雲間のわかすの梅原霞ぞ立ぬ
わ　きてうてもの日の山ゆ立てはせば小もつ霞ぞ立ぬ
代　霞霧ゆ山われば三熊野のうらの浦ゆ霞ぞ立ぬ
日　みつてをよくれぬ磯の松の葉も霞ぞ立ぬ
古　ものきる霞の衣ぬぎ捨てゆ霞ぞ立ぬ
千　つぎるまうゆ神つるいもきそ霞の衣立ぬ
新　水のわるものいづ捨ぞ立ぬ
千　ものもふ　とすくてやもいづ立ぬ
後　紅葉ぬ霞ぬ霞ぬ立ぬ

俊成
頼輔
孝善
慈円
長方
寂蓮
詠人不知
角兵
定家
家隆
亘房
好忠
仲正
公勝

梅ぞ立ぬ霞ぬ霞ぬ立ぬ
古　とりとはれば神ぞ立ぬ梅の霞ぞ立ぬ
後　青柳の糸ぞ立ぬ霞ぞ立ぬ
日　岩の峰ゆ立ぬ霞ぞ立ぬ
日　うぐひすの声ぞ立ぬ霞ぞ立ぬ
日　ものとれば霞ぞ立ぬ
代　霞ぞ立ぬ霞ぞ立ぬ
古　春やぬ紅花やぬ霞ぞ立ぬ
後　わらはの年ぞ立ぬ霞ぞ立ぬ
代　ものもふ霞ぞ立ぬ
日　梅の花ぞ立ぬ霞ぞ立ぬ
日　いづらやゆ立ぬ霞ぞ立ぬ
日　青柳のいづらゆ霞ぞ立ぬ
古　花の香ぞ立ぬ霞ぞ立ぬ

作者不知
詠人不知
又作
忠房
好忠
奥風
恒保
言直
素性
乙縄母
右大臣
[illegible]
友則

霞

霞春雨

久待霞

霞遅

春木号逝

早号

初関号

家隆

公任

枇杷大納言

忠岑

源子内親王

元輔

八条大納言

兼盛

弘徽

也実

政長

仁和法皇

宗社

土佐内侍

千里

孫人麻呂

俊頼

兼盛

弘徽

資業

[illegible]

実盛号

幸こけ号

[illegible]号

号紅春

号先号

山号去号

古墨号

若草

雪中草

雨中草

寒草

霞草

惟明整

順

善政

素性

勇助親王

恵性

後頼

公任

雅平

朝草

山草

山家草

野草

園草

旅中草

行幸草

関路草

実方

守光整

詠人知

鶯宿梅

作者不知

棟梁

摂政左大臣

赤人

詠人知

作者不知

兼澄

隆信

太上天皇

里梅号
園花号
樹春号
梅間号
梅号
柳上号

春中号
梅遍
梅美号
春惜花号
梅祇号
寄梅号述懷
梅集

橘若葉
聽今葉
雪中若葉
卯若葉
原若葉
殘若葉
澤若葉

代わけるふるさとに青く物ちらつくこそ世ごとよりの葉橘てわ
用 里人のあるう橘らしかるさ沢ほ
接 ほとゝぎすもるこのうち沢ハ岩の若葉の若葉のみるとけるを
詠 りてこねくもものべとものの世ふかしみてみつめるみるこ
古 若ぐわものの世ふかしてあるらしみ家家よふ岩ハちつく
代 ちこぶ若先衣のとゝ沢わしてけるあるなを
接 仙岩のもぐこる里のかをぐ野ふいざおとゝしあるをてん
古 ゝしはは行の岩ぐる清うくに知い世ごのつれたるうう
古 ゝるう橘 秋沢人ゝば沢ゝぐら野ごの歳も立くされむ
代 東沢よりやとうしをいるる器四の系まるむれ法若
用 歳しく萩のやうの系ゝるのるう橘ん
詠 しべてやる殘葉ほむん世せ家やこもの渡の蜂をの野よ
代 岩沢る世沢ゝ岩葉それるぐう年沢ほをぐゝるまるひ
用 いぐやるる岩清やう里しの山沢ちぐも橘をうし年けるる

順
為家
国駿院
はしかる紀
仁和三年
ゝゝ人ゝん
雄宣
読人不知
要ゝ
東慶ゝ
ゝ乃ゝの撰歌
後水
西国寺入左
東園

田若葉
若所若葉
故郷若葉
年暮接若葉
書若葉祝
小若若葉述懐
年十

代わうと四のこぞれるのとふゝみをゝ若ゝのあるとやゝをゝしん
用 根芹ほゝ若沢四小ちをらて家のをそのわれねはぞうし
用 ちくれがよ代のるちゝをみて後せちゝはよるうゝ年
反 ふる里の野ゝべゝのとゝくるる沢いぎをちをよるう橘ん
代 わうゝ岩ちくぐふるるのかをの野ゝよるる沢ぎうゝ
接 かをぐ野よをの年ほをゝぐ若せねのるるをゝう
代 若沢ゝてゝをのつれるほゝのの沢わ年く年の若ゝるら
古 沢が野ふつれ橘を若代沢ゝをゝ沢野ぐゝ
反 ゝやゝちゝ若葉よをゝて若のをたうれをゝん沢ぐ
い ちをゝぐる神ゝちをせよ若ぐたわをほ若日野の若ゝをう
古 若歳をゝ川のゝぐ若葉ゝ野ゝ若ゝ人ゝをもやゝと
万 とをゝふ若ゝをわのかぐゝちのゝるゝぐゝ朱みゝのゝ沢
古 ちゝぐ若ゝ若をゝをやいぐをゝ三若野のゝのゝしを若ハゝつ
接 ける立てゝたゝる若ハ橘若ゝくゝぐゝるゝをぐゝる

九条兼実
好忠
家隆
行朗親王
雄宣
国駿院
三河内侍
素性ゝ
太政大臣
要ゝ
奥風
作ゝ不知
読人不知
ゝゝ

山春雪　重之

野老雪　清方

園春雪　定頼

木老雪　肥後

江老雪　深雪父

春雪似花　芳河内

入道摂政

赤人

信実

仲実

俊輔

花紅

基俊

貫之

以実

老雪歌清ト

寄老雪恋懐

残雪

野雪

山寄残雪

郭郷雪

単残雪

木雪

西家

命之

巨房

花紅

頼実大臣

貫之

基俊

祐挙

教長

有家

芳子

国信

勝命

以実

樹上殘雪
殘雪似花
山殘雪
餘寒
餘寒月
山餘寒
梅

根ふる花とえんびきぬ咲ね梅ぐさの名のひきえ
たんぐしつくそりてとをえんが消わ(ぬ)雪の花こえ
家雪の梅ちるしてそよ此のこの雪ぬ花と枝えん
梅の花さえとうぐやうり雪のこよなまち雪のふるん
なる葉はむ萩のやけ京枝さえて神ふこもるハ雪の流雪
しつこ入枝げ雪ちの月雪ろ沢ろ雪ハふつて
雪ハ枝歳ふ雪ぐ風ふえて雪げこるる雪の枝ハ
よりの山梅ぐ枝よ雪ちる雪ぬ雪げる年ふ雪ぬ
うきこよるそはきぬぐ雪ちこてちまこりよ梅花ふ
梅花とうちこ雪ちの枝れこ雪よ雪ちこ
ちしてこと遠ぐよ梅ち咲れを雪よ白くきけるハ
ちふのえれぐし　せどうち
雪えれハ雪ぐよ先咲ふ風ちるね花ぬしきこ雪ぐ
まのぐき花の雪ふれや　せどうち

仁安堂法壁
家人ちに
は
雪ふこ
法良
能茂
橘政長後
西り
読人知
昭人
よしん

春上十六

梅
山梅
梅木
梅枝屏
伝梅賀茂
梅盛
梅花美久

梅ぬ家雪の梅の雪ぬ花ひるハ雪ちは月ふこえ雪ぬ雪ぐ
つくぬちちぐ雪わえん梅ふ雪つぐ雪ぬ一雪ぐ雪年
咲るさこたこうば雪ちこうむ雪ちの雪ぬ雪ちこ雪ぬ
とうぐてふるこうねつぐ雪の雪ふのうちは早ふこうれむ
うこうふ雪ふ雪ふ雪ちこ梅の雪雪ぐ雪ぬこうぐ雪
雪ふこ雪の梅こふこえねいうぐここえ花ふ咲ふれ
雪ふこてうひいふるれ梅花むこうこれね人ふ雪世う
ふぐその雪いこして梅こ雪ふ雪の雪ふ雪のこうハ花こ雪ふこ雪ふ
千ぐこうこ雪ふ雪ふの梅ふ咲ふこハ沼こねこ雪ぬこう
式ハるる雪ふの花ふ咲ふこ雪ぬ沼こ雪ぬこ雪ふれ
雪ぬぐこうこてこうこ雪ふこうぐこうのこれこ雪ふれ
うこうのこいこいここぐこいここぐ咲の雪はこ雪ふうのこ
雪ふの雪ふ雪ふこ雪ふこ雪ふこ雪ふ梅ふ雪ふ雪ふ雪ふ
雪ぬこれぐこ雪ふこ雪ふ雪ふの梅こ雪ふの雪ふ雪ふ雪ふ

秀能
隆房
大宮
經盛
馬内侍
廣綱
出羽
鎌倉右大
等文
家持
法人
西行

雪中梅

古 ふりそむる雪にまじれる梅花ちりてたちてぞ見わけざりける　作者不知

同 わがせこに見せんと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれれば　赤人

代 ふる雪の中にまじれる梅花香のひとりにぞ色ぞみえける　信明

梅似雪

古 みそのふの百木の梅のちる花のあめにとびあがり雪と降けん　家持

新 降雪に色まどはせる梅の花鶯のみやわきて忍ばん　摂政太政大臣

代 梅の花香をだにそへてにほはずはふる淡雪とまがへましやは　以を

雨中梅

同 ちらでそ後に咲ぬる梅の花あはれひさしく見てぞ有ける　以忠

六 ちるとぞ見るべき物を雨ふれば濡れてや梅の花笠　よみ人しらず

代 げにもまた雨の降にぞ梅の花おもひかけねそれもつれづれ　為家

梅風

続 吹風に梅の花色さへあかずにほふらし　能宣

同 ふく風はいとひもそへる梅の花ちるにこそ思ひ増らる　兼輔

梅薫風

後拾 うめの花かばかりにほふ春の夜は風そよぐれにさそはれ　経信

六 梅の花香を吹かくる春風は衣にそめばいかなるとがめ　読人不知

代 にほひくるそれとなしに梅が香の風や背きけん　後京極

<left page>

依梅待風

夜風和梅

梅薫夜風

梅香

梅花久薫

梅花遠薫

詞 うめの花色はにほひて吹風は香こそ哀れとおもひそめつゝ　小宰相

同 咲くれば香はまつしく梅花ちらさねたゞのけふ風もがな　時綱

月 げる風の吹こそゑらさば梅の花きよ垣の外は匂ひながさまし　康俊

千 春の夜はふきまよふ風のうつり香に木ごとに梅と思ひけるかな　崇徳院

新 梅がゝのたが里わかずにほふ夜はぬしさだまらぬ春風ぞふく　行意

拾 おぼつかなたれかしらまし梅の花かぜよるぞしらるゝ　経信

古 宿ちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり　読人不知

同 色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも　同

後 [illegible]に折つる物を梅の花こき香にわが衣そめてん　閑院左大臣

六 まひきてふきざらせば梅の花うつりしその香はうつし　伊勢

千 かばかりの香の絶せぬは梅花咲くる風ぞのどけかるらん　久我内大臣

同 人ごとに枝をりそふれど[illegible]うめのにほひ哉　隆寛

後拾 風ふけばとほき垣ねの梅の花香はわが宿の物にぞありける　清基

新 心あらばとはましものを梅が香にたが里よりかにほひきぬらん　俊頼

梅香何方　　前盛

梅葉袖　　前大政大臣

梅袖香　　素性

梅香袖香　　伊任

梅香袖　　資隆

梅香袖　　忠度

梅香袖　　素性

梅香袖　　有房

梅香袖　　通重

梅香袖　　読人しらず

梅香袖　　同

梅香袖　　文屋朝康

梅香袖　　懐子

梅香袖　　式子内親王

代　ちぐさの野べ　ものとせし　梅ぐゑ　ぬしをこそ　ちるらんに

同　逢坂の　梅ぐゑ　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

後撰　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

同　うぐひす　ぬしをこそ　ちるらんに　ものぼうなし　ぬしに

梅香園　　後頼

梅香園夜梅　　長房

梅花薫　　読人しらず

夜梅　　慶伊法子

園夜梅　　ちぐさの野べ

花梅尋香　　前盛

梅　　前盛

朝梅　　前盛

夕梅　　前盛

春上十八

目次

梅花素月　信繁
禁庭梅　定家
社頭梅　俊成卿
古宮梅　家隆
古色梅　忠良
九郷梅　三房
山寺梅　寛信
　　経信
　　四条延
　　藤原基俊
　　武平時聖
　　俊成卿女
　　藤原摂政
　　鎌倉右大臣
　　家動

千はるの月はなのあけぼのの梅花　信繁
梅花うちにほひぬるかとみるまの月のみぞわきてしる　定家
日うめのはなをもとも春ぞいとすぐるこのもの花の月　俊成卿
日大宮の梅のうちにほひぬるかとみるまの月　定家
動いく里の月の光もかけそへん梅花ぬれるえだのよれる月　家隆
千ひとしほつゆぞそへん梅花ぬれるえだのよれる月　三房
詠おりてみるかひもなき梅花ぬれるえだのよれる月　寛信
金神垣ふる雪ぬぐうかの花をもふる雪とみるかな　経信
動するの月ふかしてやどりぬるこのまのくもの梅花　四条延
詠さらぬだにうちにおもふ梅花ぬれわすれてやどりぬるかな　藤原基俊
代さらぬだにうちにおもふ梅花ぬれわすれてやどりぬるかな　武平時聖
動雪波ぼふ波や雪の梅花いまもなほ波にぞ　俊成卿女
代ぬれぬれも雪波とぞ梅花ぬれぬれも雪波とぞ　藤原摂政
詠梅花雪波とぞ梅花ぬれぬれも雪波とぞ　鎌倉右大臣
動

梅花素月　実平
禁庭梅　國基
社頭梅　武平時聖
古宮梅　信定
古色梅　俊成卿女
九郷梅　経信
山寺梅　大宮道
　　さき手
　　藤原定家
　　ゆき行
　　敦家
　　則光
　　家良
　　良選

梅雪雲ニ
野梅
松岡梅
名所梅
梅花露ニ
梅香春水ニ
水畔梅花
見梅ヲ
社頭梅
依梅待人ヲ

月
けるの夜は雪はなほしもそこもとはぬ梅のうへにぞ
侍従実ハ
ふるはなで一方者ふる梅さくばかりとはしらずとも
侍
うめぞえぬるふきとわれ人やわるとは思ひ
月
枝ゝ咲梅のそれ咲ゝ
古
うめの花うつるばかりにぞ
侍
梅花もぎちらぬばかりの
侍従実
梅ひとぶ人のまさくやうたくん梅のかりあの
月
花ぶくるうぐいすもん梅花ちるゝ
重
ちるとるげいとあれど梅
侍従
梅ぞえのかりあもんわ
金
けいこふとゝぎらせば梅花ひとゝきの
勅
たれまくゝまぬそれも梅花わくゝ
乃
方者の梅咲ゝと
侍従
ゝとゝぶわけゝゝむ梅花ぞ
侍

康資
松泉式部
順
実延
時雨
経章
経衡
前摩
仙実
経信
大輔
廣業
ゝ

梅近客ヲ
梅冠雪ヲ
梅雪聚人ヲ
梅花留客ヲ
梅頭梅

千
咲ゝ
梅の
侍
ゝ
梅ゝ
勅
ゝの
月
ゝ
千
ゝ
侍
ゝ
侍従
梅ぞ
乃
ゝ
侍従
我者
乃
ゝ
古
ゝの
月
ゝ
侍
ゝ
乃
ゝ
侍

侍従
西りゝ
具定
経正
師礼
前盛
日
惟良
知ゝ
俊理
東三条太政大臣
実ゝ
伊衡
ゝ出

折梅
折梅贈人
寄梅恋
惜梅
愛梅
惜梅香
梅香移袂

万 梅の花先咲えだを手折てはつとゝなづけてよそへてんかも　作者不知
古 よそにのみあはれとぞ見し梅花あかぬ色香はおりてなりけり　素性法師
拾 香をとめてたれおらざらん梅花あやなし霞立なかくしそ　みつね
古 君ならで誰にかみせん梅花色をも香をもしる人ぞしる　友則
万 盞に梅花うかべ思ふどちのみての後はちりぬともよし　坂上郎女
日 人ごとにおりかざしつゝ遊べどもいやめづらしき梅の花かも　舟氏麿
代 こひ出てみんとぎらせば梅花たれまつかぜの袖の香をもおし　以を
日 袖もふる花をとはまし梅が枝にむかふまさるとの春の夜の人　信実
六 一とせに若ふるとしひかずら梅がえにふかくゞろ時もすぐし　貫之
拾 年ごとに咲はかはれど梅花あはれなる香はうせずぞありける　読人不知
代 色も香もおなじにほひの梅花いづれをうつるの花とみるべき　師光
新 浪まてちらさぬもと梅が香を袖に精ぞとむるとぞおもふ　忠季
新 すみなく折人はなし春雨の梅がえにもやぬれつゝ折らむ　長方
代 わが袖もうつり香のみぞにほひける我やどの梅のさかりなるかな　和泉式部

落梅
関路落梅
水辺落梅
梅香浮水ニ
梅花落衣ニ
二月雪如衣ニ
紅梅
紅梅盛
雪中紅梅
紅梅白梅香異

古 くるとあくと目かれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん　貫之
拾 ちらねども香ばかりにほはせ梅花香をのみぞ袖にうつしてもがな　読人不知
新 ひとりのみながめてちらす梅花しるばかりなる人はとひこで　高倉
有 ふく風は汀の梅がおなじ枝の花ぞちりける波の咲ぬる　重保
代 岸のとよ浮て流るゝ梅の香はいづれ流とくのとまるらん　又信ね
千 梅花おりてかざしにさしつれば衣におつる雪かとぞみる　大納言門
新 うめがゝは枕にさえてやにほふらん袖にしられる春の袖よ乱て　康資王母
後 紅に色をばかへて梅の花香ぞことごとに匂はざりける　躬恒
後拾 梅の花春よりさきに咲しかど見る人まれに雪のふりつゝ　元輔
月 紅のこはあくつとめてきよかれば香ぞのとかくに色はつきたれ　保忠
代 紅とおとはまされ共おかな(?)梅の花にはのみかよひけり　以忠
新 紅もみたけひつらさ紅のきぬの梅の香のしうらむ　宗教大臣
月 梅花色ことくにみえかれどにほひはつねにかはらざりける　東助

寄柳述懐

古柳懐旧

柳

柳露

柳経年月

古柳

読 こぞもうつろにもかはらぬ代にかけて年をふるかな　顕輔

金 昔見しわがすみかの梅がえの花にふる枝の柳ばかりぞのこりける　基俊

同 ふるさとはあれにけりとて見る人もなき柳ばかりぞ　作者不知

後 青柳の糸よりかへておもひいでよなれし昔の春のことのは　いを

新 佐保姫のいとはふくさの青柳を吹きしく風をうらみしもせじ

新 春雨のふるさとならば柳の糸の縁ぞもひきかける　兼盛

代 佐保姫のかづらのあをやぎひとえだも　邑房

同 春風は吹きかよひつつ青柳の糸のみどりぞ　基俊

同 いくとせかけても見つる青柳の糸はひとえにしげりゆく　よみ人しらず

後撰 わかれしとき見し青柳の糸のたえまにかはらぬ色　忠岑

勅 山姫のとしのをながくよりかけし絶せぬ柳の糸

新 ふるさとのあれにし柳の色かはる昔ながらのいざなみぞせん　前太政

同 くちはつる大江の岸の柳かげこえて見わたしの行く　権仁親王

同 青柳の糸にむすばるる春の心をいくよのこさん　為尹

雨中柳

柳露似玉

深春柳

夜柳

柳風

柳風静

柳乱風

柳糸随風

義 青柳の枝にかかれる春雨は糸もてぬける玉かとぞみる　いせ

古六 けふの雨にかかるしづくに我宿の柳の末も色ぞまさりける　讀人不知

自 雨ふれば柳の糸のみどりこそ末もむすぼれてゆく　玄珍

新 浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か　遍昭

続 春風に夜の間はさぞとみだれつつ絶まよひける青柳のいと　季遠

代 ける夜に絶せぬ柳のいとの風まづすぐるかぜぞかよふる　豊之

同 青柳の糸よりかくるかぜにちらくと吹きゆく月かな　忠見

新 いつはればかぜはくるをも風にみだれつつ青柳の糸　季遠

自 わららなる花はいとふ風のくるるまにみだれる柳の糸　静縁

代 のどかなる風のままに柳のなびくもよはしき春のくさ　経信

同 青柳の枝もたゆまぬ君がための風の心をすずしかるらむ　伊綱

拾 とけぬれば風のまにまにも柳のいとはみだれぬる　読人

六 よる人もなき柳の糸はなれば吹くる風にみだれつつ　為之

金 打ちなびく吹くる風にまかすれば柳の糸　公実

禁裏柳
関白柳
山家柳

故郷柳

水無柳
河竜柳
池底柳

柳陰池水
柳掛池水
柳糸紫水

金風吹柳の糸の乱れよりふるびくふけるさびしさ
動 百勢や大まんのもづくりみそぎくも柳のいと
接 ぶくまばしりてゆくなどもの柳のあるてうばくる
月 いづくのかわは寒うたんど堤の柳ともいとさ
形 しい池の中置ひとしるの柳ともいとさ
詞 故郷の庭の柳とたゞ深みゝ濃ゝ
代 者みゝうしの柳のもの柳をふもとうくもいきあうら
形 そせ決六日の深の柳ともうくふくふもいる
月 柳のゆるさの河水のもの柳いとはいもべとうふるも
接 もの日は新もふ池の縁は柳のあもとおいえるる
定 風ふるべ沿のわやとるる池ふ水ふるる時のも柳
月 吹べ池のでみる新うる柳のまもえぶれげる
接 池みのもの柳のもふもづえよまもてべる
六 みのこふ新おもべくも柳池沿のわやるふもとる

陵は藤
さねも
清人示和
第二言
西りゝ
海辺
定家
立紐
坂上郎女
もの今
雅平
宗長
紐衛
清人示和

呼柳
苦柳
行逢柳
逆柳
達柳
柳糸

柳垂水
柳頭柳
駱柳
宗長

昔の人の柳いとふ沿さんだ
代 者ふ池の岸のもの柳の
月 苦風の沿とふ沿そるる柳柳のいとも
形 うらもびきもはまふうらもの沿ふむ
接 くふてでもいの沿ふるも柳の糸いもそそうる
形 もの風の最吹とく沿もう乱れそもびくも柳の糸
動 池ぶら沿てでるふもの糸池ぶもの風ふもむ
六 もでとふ沿せ柳のいの者柳の風ふもとふ
月 ふの者のもとふふもるる柳柳のいもふもふ
接 岩の糸ふもるて人も柳沿なふふもけるのふ
六 糸池のふ沿ぶもふ柳沿なふふもけるのふ
月 石岩の大まんのもづくふる柳ふふんどうもふ
六 岩ふふもふもびきふの池者柳の糸もふびもふ
代 岩ふふもふもびくふふ岩ふ糸のもづて沿ふ柳ふ

少将
家也
清人示和
高倉
敦宣
大蔵
はを
丹ふて
定邦
清人示和
ほふかき
作ふふ和
丹ふふ
宝羽

若草

雨中若草

垣根若草

山家若草

野若草

野亭誹題

蕨

早蕨

野辺蕨

山蕨

代 あさみどりの草ハ見えずしりえぬらむ春の日数のほどぞ見ゆらん　師継

六 とへかしなくもらぬ草の根のみえて流るゝ [illegible]　定[illegible]

匠松 [illegible]べハれハ [illegible] の月のつれなき [illegible]　義孝

勅 あさ若の垣根の草ハ浅緑うす [illegible] 色ハ深くなる　[illegible]

月 いかにとけふ垣ぞしむる [illegible] 小色付ける野べの若草　肥後

月 むかし野の [illegible] 見えける垣根のかげの若草　[illegible]

代 世の [illegible] 日ごろ山里の [illegible] の草もけるかな　[illegible]

勅 [illegible] 野べの緑の若草に [illegible] ある雲のむら消　[illegible]

勅 かすが野ハまだ見えぬ若草の煙らぬ [illegible] 萩の焼跡　[illegible]

月 さうしびハ [illegible] 小ねてゆかりに [illegible] て野べハまさる　[illegible]

代 けふもまたとこそなき [illegible] 人の野もせ煙ハたえず [illegible]　[illegible]

月 はわらびもえ出る [illegible] 野小焼原わきて人の [illegible]　[illegible]

月 蕨生るやその原野小もえいでて [illegible] さとぞ [illegible]　[illegible]

六 みよし野の山の蕨 [illegible] れハ [illegible] ある煙か [illegible]　[illegible]

春夜月

春和待月

江上春月

不明不闇朧月

垂簾月

庭頭有月

野 浅みどり花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春の夜の月　孝標女

勅 大かたの霞に月ぞくもりける [illegible] のすがたにして　小宰相

六 あれはてバかげもかくれぬ [illegible] 若の庭ぞ [illegible] の春　[illegible]

勅 梅が香も [illegible] 昔よりはにほひぞくもる春の夜の月　[illegible]

代 かすむともいはでそれとも [illegible] 見えける春の夜の月　[illegible]

月 はるかなる [illegible] 霞める月の [illegible] の空　[illegible]

万 かすがなる三笠の山に月も出でぬかも [illegible] 桜乃 [illegible]　作者不知

勅 見えぬかも [illegible]　せどうか

勅 難波がた汐干になごり霞みける [illegible] 月夜よ　[illegible]

新 てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき　千里

勅 春の夜の [illegible] 月夜 [illegible] 霞まん [illegible] の [illegible]　丹後

代 さびしさは [illegible] にほひてすがる [illegible] 霞ていづる [illegible] の月　隆房

月 [illegible] ふかくつつむ [illegible] ねぬ月かげの [illegible] 霞むらむ　[illegible]

月 霞こそたちへだつらめ春の夜の月はさやけく [illegible] べかりけり　中務

春山月
美濃

美濃雪
春山霞
山奇美濃
山長美濃
遠村美濃

小式部内侍
宣一卿
入九条の摂政
秀家卿
定家
隆信
定家
俊光
公経
基国
忠良
定家
公実卿
基氏

海路美濃
春雨

傳人麻呂
日
巨房
仁王
ちくぶ
市司
国防内侍
基氏
日
行尊
摂政
保孝
公実卿
公経

夕美雨
夜美雨
山美雨
林下美雨

野辺雨
山吹春雨
梔春雨
躑躅春雨
新古雨述懐
帰雁

代　春さきの海とそなれば花の色も海ちらすなる
古　春せこそ名春さめつるこぶ松ぞ色濃ちけるる
代　はふとて緑とりそる春雨のうるおす葉
万　家人のたそひまうしもの雨のうれどあ紅わとと思へば
野　たぐくこそものすべのさびまいものでたくしの玉ゆ
代　春も来も呼ふわひるる雨よりれる袖は濡之雨
古　ける春たたなはつとそてり春は雨をたる里小はなるくる
拾　つんどわるね花の雲うり春は春ひるる袖ひるる里のをもをつき
医務　却も春ないふ数りて春ぐのの花の風よ海ちをあるん
金　とけて紙ふ海る春ぐのをもたゆ雨ちるるむ
千　ちくんぐあのして春もとはいて海るを海小ちひ色ちり
物　古海ちあまのとてるる春ぐのひ羽ひよもの海ちるるん
月　ことすば花の雲はつんて海ちはぐ山のの雨ちを
内　ける春とひけいわる鶯ちて春ちあとしたいらん

高遠
要方
也房
作者たこか
行基
九条ふれ大下
伊勢
読人不知
和泉式部
経通
信礼
資賢
光俊
貫之

雁

春雨春雨
春雨別花
海花忙
雨中海花
春雨中帰雁
嘉海花衣

代　ふる春ちく良いぐく海雨ちの秋ちの春ちくるる春雨
内　ひるるの花の白ちを海ちくるを海ふ海る春ぐの
月　ちくるのとも春てくええれるんあてるるる春ぐね
続　ひぐ春ぐのとけるの海ちくを雨ちくるる春ぐね
医務　とちねんどつええむ海る春ぐの花の風ん人ちるれ
行　中ふ雨海ぐのちるるん花の基ふ海ちるるぐの
代　ちるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
和　ふる里の花のちひるるるるるるるるるるるるるる
歌　ちるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
月　ちるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
医務　ちるる春を海ちるるるるるるるるるるるるるる
拾　古海ちの春ちるるるるるるるるるるるるるるる
金　春せるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
新　海ちるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

経信
丹後
資保
馬内侍
陸奥
河内
媚子内親王
定家
俊基
[illegible]
[illegible]
為通
伊勢

中納言家
雲上殿
小倉中納言
曙殿
侍従中納言
侍従殿
遠殿
遠殿中納言
侍従殿

師氏
通秋
侍人
侍女
寂蓮
国基
京極
源信
赤染衛門
紫仲
弘補
東中
東方
頼政

[illegible]

[illegible]
田中
田里殿
羇中
行幸
都殿
中納言
[illegible]

春駒
牧春駒

定家
雅宣
花山院
教長
招提
武部
[illegible]
侍女
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雜

[illegible]
原[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

関峰子名
森峰子名
深山峰子名
暮春峰子名
花さかり同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

童桜

京桜

雑桜

[illegible]

物

[illegible]

代

[illegible]

朝

[illegible]

形

[illegible]

後拾遺

[illegible]

詞

[illegible]

月

[illegible]

後撰

[illegible]

月

[illegible]

月

[illegible]

形

[illegible]

月

[illegible]

動

[illegible]

月

[illegible]

代

[illegible]

童府

後拾遺

伊勢大輔

[illegible]

清原

[illegible]

京桜

京極為兼政

[illegible]

読人不知

[illegible]

紀貫

[illegible]

信家

[illegible]

[illegible]

待花

[illegible]

月

[illegible]

代

[illegible]

月

[illegible]

月

[illegible]

後撰

[illegible]

月

[illegible]

月

[illegible]

形

[illegible]

月

[illegible]

代

[illegible]

月

[illegible]

代

[illegible]

[illegible]

待恋

[illegible]

山家待花

関中待恋

待恋旅

待恋遠聞

山の花遠シ

[illegible]

前後

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山寺尋花

山家花遅

載花

大江載花

尋花

最山花

遠見山花

最遠近山

山路尋花

最深山

雪と尋花

尋花空処

逐雪尋花

遠尋花

最遠尋花

金山桜ごとに咲のはるかぜ　経盛

はるばるとたづねてきつる山ぢかな　隆房

ちりぬといとはぬ山ぢとは　丞忠

花の本とうちもるくれば春をぬしの　単盛

代なる花いかのまことも　奥平聖

千もとに春ふ程ぞ　師教

物ものべて花のもとをゆきくらす　教の弟

続ふるべて枝ものこよ　堀川天皇

風ぬけるうちの山ぢ　度会

月花をそなるさにれば白雪の　孔昭

月花のかをいそぐ山路　基定

代峰ぞ見つるつまむ山ぢ　基良

月ぞ見つるつまむ山ぢ　堂後院

千ふるる花のわくらはたちまち　後成

物ふるる花の姿ぞ　定家

ちりぬる春の山ぢ

月花もとめてたづねてこそ山のまちぬれば

代花のかをいそぐ山路　弘房

月ぞ見つるつまむ山ぢ　西行

千ふるる花のわくらはたちまち　摂政

物ふるる花の姿ぞ　重保

月花をもとめてたづねてこそ山のまちぬれば　身輔

代花のかをいそぐ山路　白河院

月ぞ見つるつまむ山ぢ　久我大政大

千ふるる花のわくらはたちまち　有房

物ふるる花の姿ぞ　小納言

月花をもとめてたづねてこそ山のまちぬれば　為家

代花のかをいそぐ山路　隆祐

月ぞ見つるつまむ山ぢ　教仲

千ふるる花のわくらはたちまち　後礼

物ふるる花の姿ぞ　大進

雨中遠花

遠樹夫間雪

遠見花

遠見雪

初雪

花初開

小雪

山花始開

山雪始開

遠見山花

待遠雪一枝

雪中仙美人

花盛

山花盛

雪新未盛

遠花感

春上三十二

見雪

見雪花

月まつ花

雪下見月

雪見花

雜

朝見花

毎年見雪

後拾遺　梅花をしたくれなゐにそめしかな春の夜かちるもこそをしけれ　紀貫之
代　いまもまた花をしたれば春の夜のやみにぞ人はまどひぬるかな　同
日　ちるものとしらでやまぢにうぐひすのなくこゑのみ山ちかくきこゆる　同
日　ちるとのみ白ひかりかとまがふまで花ぞ雪とぞ見えまし　同
拾　ちるもこそ花をしたれば春の夜のやみにぞ人はまどひぬるかな　同
拾

見恋歌

見山花

遠見山花

旅中見恋

山路之花

馬上見恋

名所見花

入隣恋之恋

金

ける屋しらねどさきそめし花の白ひかりかとまがふまで

白雪とまがふまでに見るものを春の花かと

代伊勢物語に

ふかけるはるのあけぼのとあるを人やえるらん

後撰

ふかのをのをのへにたちまうもとしのうちにぞ

日

遠みいてしらなみとぶ桜花山路の雪とまがふまで

金

とつせやまをくるかぜのさそはれて天のはしたてにまうこそ

日

ふかもとにいまこそ波のとうかるべ峰の桜やさかりなるらん

千

かつらぬきやまのこれ桜をみるものとおもふ

月

なつかしきもとをとそ見ようしら山桜白雪とまがふまでに

代

ちるもまがふ白雪とまがふまでに

ちるはこの花の枝にをれば

代

ちるはとやそらにもわるを桜花わてをくんとゆくまで

後撰

ひとしれぬ思ひをそれの京ふとりとりふかの花をさらせば

日

我家に嫌ふまでに紅ぶかの花のあるかぎりとなんせりける

佐野

佐野をいへ

香細

臣房

義忠

臣房

源川流

家補

信親

馬持侍

忠之

左衛

女将

親盛

見恋歌

恋花

恋花

花の咲ちりその後をしぬぶとのうちにはねをかくるる

代

ものおもふとをしぶるとの花すばるをしぬぶ恨ざり

なけるの枝にねくらで花のうへにんのどんえんでくるもむ

後撰

花ごとにふるるはなれど桜花あわでも年の積をわびる

代

なげもかくこひをわるん桜花ちるまでなれるまで

和

ちるのをのの花ふこしのうてをかぬるまでに

古

花のごとの花をうべ出ぐしてそ昔ぬまるゆるまを

後撰

ありげふるれば桜花咲ぬ

代

ものをもふるとをふるもの花ぬ咲ぬ桜花咲るどふねをそうる也

後撰

あくるまもあれ年にはたてる花ある人のうをくわやけるら

なし

心はるる山年にはたてる花ある人のうをくわやけるら

後撰

とをふるとふ春とて○ば桜花ちりてやをれば春たん

千

山桜とむんのいく春をちるまの春のふりをるるむ

新

花とても又まるるまでにはたらし花の春八をやをちねらん

佐実

枇杷皇后

貞平親王

実政

貞平親王

後宮

後人名

並威

以世

右大臣北方

一宮駿河

味見

内侍内侍

高光

里家霞
云都の春
思ひかの友花
思ひ出る郷の霞
不忘思春
思山花
遠思山花

思山里霞
夜ゝ山花
益花思花
遠思花
老思春
鶯の花ノ

代 慶応元年の春の霞のうち野の花もいまやさかりの年
後 しのぶとふちりなまりしば梅ちれなんとすれば
長橋 ちりて後ちるべきかとするだにかすかなる物にはあらぬ
内 あるべきにあらぬ霞ふかゆき山の梅ちれどもちらぬ
中 和歌ばかりの花の白ひかりにかゆる山や峰の松のはなん
野 ちりてもなほ残るもの春の花のかをいふとなくむ
橋 慶安元年の春の梅ちりてやまぬ花ちりぬ
内 ゆらんの花もえるべくもあらぬ法のうちの花も
子 少梅思ひとはかさねぬ春の花ちれわくるべき
先 ちるべきにあらぬ物ぞ花ちれどもかさねぬ
後 ちるべきにあらぬ物ぞ花ちれどもかさねぬ
内 ちるべきにあらぬ物ぞ花ちれどもかさねぬ
重 ちるべきにあらぬ物ぞ花ちれどもかさねぬ
新 梅花ちるべきにあらぬ物ぞ花ちれどもかさねぬ

安倍
宗任
元長
中将
讃岐
院を
高倉
堀川
引経
藤原
上総
定坊
帰光

歌山花

終日歌山哉

樵中歌哉

見有感橋ノ

雨中歌哉

歌哉終年

毎年歌哉

花歌ノ哉

愛山花ヲ

代 不ぞ昔の春も白ひもむたぐ行ゑ花ぞ花ぞ

新 ら賀山桜しも山ぐり花さぐ花ぐ花ぐ

けくら後を山ものもぐらを永ゑ日もわわ

堂 九重小ゑ〜く白ゑ世ゑ梅のどゑ花ものぬとぐぐや

医橋 ゑゑゑゑ小花の花ゑゑのゑゑゑゑゑゑゑゑのゑゑゑ

医橋 ける梅の花の枝ゑ流れゑ桜ゑゑゑ花ゑゑゑ

新 ゑ花ゑゑゑの花ゑ花ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

続 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

代 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

代 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

高屋

三位国ノ

大江元重

宗ノ

礼言

教ノ

西行ノ

秋虎

西ノ

重政

後人ノ和

家仲

忠教

教出

禁庭愛花

毎年愛哉

懐中ノ花

宗宗宿

代 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 年ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

後 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

続 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

後 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

後 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

後 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

新 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

代 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

自 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

後 ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

五摩法橋

中乙蓮ノ

仲宣

吳智ノ

後人ノ和

松乃丸

清正

伊光

資隆

基綱

ゑゑゑゑ和

義懐

山田法師

道宗

梅

対花

独対

対花忘人

対花思猶

桜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪天の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風動花芳

花芳風薄

芳薄風

[illegible]

[illegible]

伊勢

同

行通

後乳

教也

裏風

擬詩天下

[illegible]

[illegible]

[illegible]